越冬支援への ご協力に心から 感謝いたします。

皆様からのご寄付と助成により、秋から年末年始にかけてレバノンでは、パレスチナ人シリア難民、以前からレバノンに住むパレスチナ難民、シリア人難民、合わせて3,000世帯以上に、越冬支援として、燃料や食料を配布することができました。山間部に住む1,500世帯には灯油192リットルを配布しました。また、ベイルート、北部、南部の難民キャンプで脆弱な1,529世帯に食料品を配布しました。燃料配布と食料配布の対象は基本的に異なる世帯なので、人数としては12,000人から15,000人に支援を届けることができました。

深刻な経済危機に加えて新型コロナウイルスの感染拡大で、レバノンで暮らす難民の人たちは日々の食にも事欠く状態で暮らしています。しかも、レバノンではベイルートの爆発事故の影響もあって、パレスチナ難民への支援はどんどん減っている状況です。

そんな中で、今回の配布食料や燃料で4週間程度、人々の生活を支えることができました。皆様のご支援に心からお礼申し上げます。

――いのちづな

これまでパンなど基本食品と灯油やガソリンにはレバノン政府からの補助金が出ていましたが、春以降はその打ち切りが心配されている中、燃料は1年前に比べると1.5倍値上がりしています。今回の配布でも1,500世帯分の灯油を確保することに非常に苦心しました。「子どもの家」のカセム代表が燃料店と粘り強く交渉してくださった結果、1,500世帯に同時に全量配布できたので、ほっとしています。この冬は昨年の大寒波に比べると少し寒さがましですが、それでも山間部では夜は零下10度近くになり、依然としてテントやバラックで生活している人も多いので、暖房がないと命を落とす危険があるのです。コロナ感染防止のため密にならないように、また配布対象でない人たちから要求されることを避けるため注意しながら、地域によっては給油車を回すなどして、配布しました。

――内戦終結後最悪の状況

経済危機とコロナによる失職で、多くの家庭では満足な食事ができていません。そのため、家族のエネルギー補給になる食料を配りました。レバノンでは現在、1日5時間程度しか電気が来ません。それ以外の地域はもっと電力が不足していますが、貧しい人たちは自家発電機を持たず、民間業者から電気を買う余裕もなく、冷蔵庫も使えません。米、豆、油、缶詰、砂糖、乾麺、トマトペースト、ゴマ、チーズなど保存のきくものを配布しました。ロックダウンと重なった時には、人を集めるのではなく、バイクを使って各戸に届けました。受け取った皆さんは口々に「子どもにお米料理を食べさせることができた」「ゴマは高くて買えなかった」「子どもはパスタが大好きでうれしい」などと喜んでくれました。

難民の人たちは定職に就くことが難しく、農場や建設現場での日雇い労働をしていますが、経済危機と新型コロナ感染拡大でほとんどの人が失職しています。国内の治安状況も悪くなっていて、出入りに検問があり、よそ者が入れないパレスチナ難民キャンプでも強盗や殺人事件が起こっています。前述のカセム代表は「内戦が終わった1990年以降、最悪の状態だ」と言っていました。

燃料を受け取りに来た親子

燃料配布

配った食料品

食料を手渡す

――何としても生き延びるために

レバノンにとどまっている日本人駐在員たちや現地スタッフもできるだけ配布に立ち会い、受け取った人たちの声を聞いていますが、その一部をご紹介します。

食糧配布を受けたひとり親世帯の母親は、「夫がなくなり、職もなく二人の子どもを抱えているため、親せきを回ってご飯を食べさせてもらっていて、本当に情けなかったです。でも食品をもらえたので、子どもたちにご飯を食べさせることができて本当にうれしいです。また世話になった親せきにも少しお返しすることができます」と話してくれました。

南部のキャンプで話を聞いた家族では、「1か月は食料の心配をせずに済みそうです」とお母さんがほっとしていました。「子どもたちは、オンラインの勉強についていくこ

とができないし、私も夫も教えられないので、親せきや近所の人の家を訪ねて、分からないところを聞いています。オンライン授業の時は、パソコンを持っている家に5、6人がお邪魔して肩身が狭いので、子どもたちが学校に通い続けられるか心配です」。

暗い話が多い中で、勇気づけられたのは、刺繍の仕事をしている女性たちでした。南部ラシャディエキャンプに住むナジュワさんは、夫が農場での仕事を失い、たまに日雇いの仕事があっても1日に400円にもなりません。「でも、私が刺繍の内職をして家族を支えたい、私たちは何としてでも生き延びるよ」と力強く話してくれました。

これを聞いて、家族たちを支える刺繍の販売に私たちも力を入れたいと思いました。

今後も可能な限り食料などの配布を計画していますので、引き続きご支援をお願いいたします。

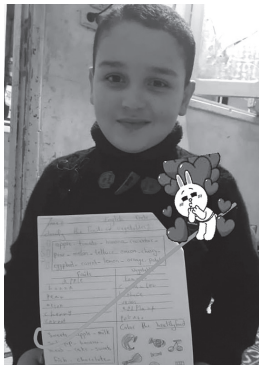
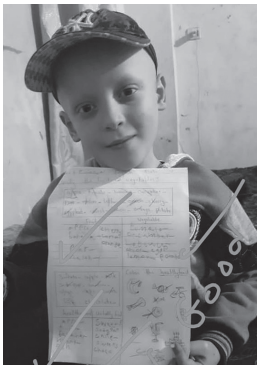
ナジュワさん

教育支援、保健支援は継続中

レバノンでは毎日2,000人から3,000人のコロナ陽性患者が出ています。レバノンの人口は日本の20分の1以下ですから感染状況はかなり深刻です。私たちの活動場所である難民キャンプは非常に人口密度が高く、衛生状態の悪いところがほとんどです。また慢性疾患を抱える人も多く、マスクなどの購入が難しい経済状態の一方で医療も不足し、感染した人たちの重症化が危惧されています。

こうした中ロックダウンが続いていますが、幼稚園・補習クラスなどの教育支援、歯科・児童精神科・訪問型心理サポートの活動は、リモート授業などの工夫や感染予防策をとりながら継続しています。今後は、衛生教育やホットラインなど、感染拡大防止につながる活動も計画しています。

幼稚園や補習クラスの保育士や指導員は様々な工夫をして、子どもたちを元気づけ、意欲を高めるために努力しています。乗り物の工作をした女の子は、「空飛ぶ箱を背負うと、コロナから逃げられるよ」と保育士に知らせてきました（写真左）。補習の指導員たちは子どもたちの提出物に「赤ペン」で返信しています。こうしたケアもあり、多くの子どもたちはコロナに負けずに頑張っています。今後も子どもたちを応援してください。

ベイルート港爆発事故 障がい者支援を開始

パレスチナ子どものキャンペーンでは、昨年8月に起きたベイルート港での爆発事故によって負傷し、新たに障害を負った人たちや、以前からの障がい者で現場の近くに住んでいて家などが破壊され、症状が悪化した人たちへの支援を11月から開始しています。現地の提携団体「レバノン障がい者連合」のソーシャルワーカーのナダさんが現状を報告してくれました。

レバノン爆発事故現場

――多くの深刻な症状

今回の事故で負傷した人の多くは、爆発現場の港に近い地域で働いていたり、住んでいた人たちです。港の周りには倉庫街のほか、飲食店や商店の多い繁華街、そして港湾で働く人たちの住む庶民的な地域がありました。

ナダさん

今回の事故ではガラスの飛散で失明した人、瓦礫で脊椎を損傷した人がたくさんいます。5歳のシリア人難民の女の子も失明しました。

ある19歳の若者は、家族経営の小さな店にいたところ

爆発で建物が倒壊し、72時間後に瓦礫から救出されました。右足を失い下半身にマヒが残り、一緒にいた兄は亡くなりました。彼はこうした状況をまだ受け入れることができず、支援も最初は拒まれました。私たちは彼にプレッシャーをかけないし、でも一人にはしないと伝えてあります。できる限り支援をするから、ゆっくりと関係を作ろうと提案しています。

近くの会社で経理をしていた女性は失明し、また顔と腕の靱帯を破損しました。9か月の赤ちゃんがいます。最初に訪問した時は、彼女にも攻撃的な対応をされました。でも根気強く通い説得することで、障がいを受け入れることができ始めています。この人の場合は夫に職があり、協力的なこともあると思います。

―――特に深刻な150名への支援

レストランのシェフは店の天井が落ち、ドアが飛んできて下半身不随になりました。解雇され、5人の子どもがいるので生活面でも途方に暮れています。港近くの会社で働いていた男性はちょうど車に乗ったところで事故が発生、右足を膝から下切断し、右腕も腱切断で使えなくなり、右目を失明しただけでなく左目の視力も半分以下になりました。三人の子どもを抱えて失業し、トラウマを抱えています。別の男性も完全に破壊された自分の店にいて複数の手足の腱断絶、骨折、そして足首から下が切断されました。この人も深刻なトラウマになっています。非常に深刻な障がいとトラウマを負った人たちがたくさんいるのです。また、以前から障がいがあって家に閉じこもっていた子どもや大人たちも、爆風で飛ばされたり、失明したり、呼吸困難になったりと症状が一層重くなっています。

私たちはレバノン赤十字社や病院、社会福祉省などから提供された400名以上のリストをスクリーニングして、特に症状が重く深刻な状態にあり、また生活にも困っている150名を選び出しています。昨日私が訪問した家族は家を失い、以前から障がいのある子どもの症状が悪化しています。5人の子どもを抱える中年の父親は失職し、おむつを買う金もないと涙ながらに窮状を訴えているのにはショックを受けました。アラブの男性は人前で泣いたりしないからです。また障がいを負ったために離婚されてしまった母親がかなりいました。

―――公的支援の欠如

新型コロナ感染の拡大で、ロックダウンが続いているため、特に緊急な支援が必要なケースを中心に、家庭訪問して対応しているところです。理学療法、作業療法、心理サポート、また補助装具や衛生用品の提供をしています。住む場所をなくした人たちは親せきの家や借家に移っています。離婚して4人の子どもを家政婦をして養っていた女性は失明し、足を切断しました。妹の家に身を寄せましたが、肩身が狭いため冬なのに屋上で寝ていました。

問題を深刻にしているのは、障がい者への差別が根強く、公的な支援がないということです。レバノンにも「障がい者福祉法」があり、教育・保健・雇用・アクセス・不動産売買・車の運転などの権利があるとしていますが、まったく実体を伴っていません。それどころか、レバノン政府は今回の爆発事故の被害者に補償をするといっている一方で、障がい者は障がい者法で守られているから今回の補償の対象にはならないと、支援が行われていないのです。

事故現場から離れた場所だが、室内は大きなダメージを受け、エレベーターには血痕が残っていた

脳性麻痺の子どもは症状が悪化していた

―――障がい者が生きていくために

「レバノン障がい者連合」は、1981年に障がい者たちが作った団体で、全国各地にメンバーがおり、3年ごとに選出される役員のほとんどは障がいの当事者です。ですから、障がいを持つことの大変さと意味をよく分かっていて、障がいと一緒に生きることを、新たに障がい者になった人たちに伝えることができます。団体は障害のある人たちが生きていけるように、生計手段を得ていくこと、また障がいなどを多様性や個性として受け入れる社会システムをめざしています。私自身は障がい者ではありませんが、障がい者と12年間働いてきたので、気休めを伝えるのではなく、時間がかかっても自分自身と向き合って、その状態を受け入れ、新しい人生を生きていくことがいかに重要かを理解してきました。

レバノンは経済的にも政治社会的にも、またコロナもあり様々な問題を抱えています。その中で特に差別され社会から排除されている多くの障がい者が支援を必要としています。日本のNGOと一緒にこうした人たちへの支援ができて、本当に良かったと思っています。